書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

最後の人間からの手紙

ネオテニーと愛、そしてヒトの運命について

ダニ＝ロベール・デュフール
福井和美訳

書肆心水

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

Dany-Robert DUFOUR

IL ÉTAIT UNE FOIS LE DERNIER HOMME

© Éditions Denoël, 2012

This book is published in Japan by arrangement with Éditions Denoël,
through le Bureau des Copyrights Français, Tokyo.

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

目次

第1章　愛しいひと、牝豹のように優雅でしなやかなひとよ　13
第2章　ぼくそのものが恥ずべきやっつけ仕事の産物なんだ　25
第3章　牝豹のように優雅でしなやかなひとよ、みにおいで、ネオテーヌを、アホロートルを、ボテロのヴィーナスを　44
第4章　オンサ、ぼくじしん、時間　71
第5章　二本の手、書くこと、文法　114
第6章　人間、神、犬　159
第7章　めまい、知識、快楽についての手紙　184
第8章　きみ、ぼく、愛、死　212
第9章　悪魔、そしてネオテーヌの情熱――たえずより多くもつこと　228
第10章　〈バンビ〉という症状　265
第11章　人類というお荷物をほんとうに片づけるべきか　285
訳者あとがき　318

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

凡例

一、原文イタリック体の部分には傍点を付した。
一、原注は（1）、（2）、（3）…で、訳注は＊、＊1、＊2、＊3…で表記した。
一、［　］は著者による注、〔　〕は訳者による注を示す。
一、原書名は Il était une fois le dernier homme（かつて最後の人間がいた）であるが、原書著作権者の許可を得て変更した。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

最後の人間からの手紙

ネオテニーと愛、そしてヒトの運命について

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

わがマダラオンサのために

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

本書の大半はナント高等学術研究所（www.iea-nantes.fr/）で執筆された。研究所の職員、役員のみなさん、とりわけ所長のアラン・スュピオに深く感謝する。また研究所の仲間のほか、相異なる教養・視野をもって研究所に参加された二〇一一年度特別研究員の方々にも。わたしとおなじく、幸運にも、グローバリゼーション時代におけるテレームの僧院*ともいうべきこの場所に迎えられた特別研究員のみなさんからは、多くのことを教えていただくことになった。それもこれも、批判の求めと自由とが――稀有なことだが――あわせて称揚されるこの場所であらばこそ。

＊ フランソワ・ラブレー『ガルガンチュア物語』（渡辺一夫訳、岩波文庫、岩波書店、一九七三年）に出てくる架空の世俗的共同体。「欲するところをなせ」を唯一の規則とする。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

世界は人間なしではじまった、ならば人間なしで完了するだろう。

——クロード・レヴィ＝ストロース『悲しき熱帯』

思い出すがいい、おまえは死すべきものとして限りある命をさずけられて生まれたが、自然を学び知ることで時空の無限のかなたにまで上昇し、そしてみたのだ、いま在るもの、かつて在ったもの、やがて在るであろうものを。

——エピクロス『教説一〇』

人間とは獣と〈超人〉とのあいだに張り渡された綱だ——深淵のうえを渡る、一本の綱。

——ニーチェ『ツァラトゥストラはそう語った』

まぐわいのめくらめくその瞬間、すべての人間はおなじただのヒトなのだ。

——J・L・ボルヘス『伝奇集』、「トレーン、ウクバール、オルビス・テルティウス」（第四の注記*）

SAMPLE
Shoshi-Shiisui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

＊　クロード・レヴィ＝ストロース『悲しき熱帯』、川田順三訳、中公クラッシクス、中央公論社、二〇〇一年、第Ⅱ巻、四二五ページ。エピクロス『教説と手紙』、井隆・岩崎允胤訳、岩波文庫、岩波書店、一九五九年、八八ページ。フリードリヒ・ニーチェ『ツァラトゥストラ（上・下）』、丘沢静也訳、光文社古典新訳文庫、光文社、二〇一〇年・二〇一一年、「ツァラトゥストラの前口上」、上・二四ページ（『ツァラトストラかく語りき（上・下）』、竹山道雄訳、新潮文庫、新潮社、一九五三年、「ツァラトストラの序説」四、上・二一ページ）。ホルヘ・ルイス・ボルヘス『伝奇集』、鼓直訳、岩波文庫、岩波書店、一九九三年。

以下、人名、書名等については異なる表記の仕方があるので、本文と参考までに挙げた邦訳とのあいで若干のちがいが出る場合もあることをあらかじめお断りしておく。また、古典ギリシア語についてはアルファベット表記をギリシア文字で置き換え、原則として気息音（アルファベットでは「h」で記号化される）を考慮に入れて日本語に転記してある。たとえば「φι」＝「phi」は「ピ」ではなく「フィ」と転記。ただし、文脈によっては、気息音を無視した場合がある。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

第1章　愛しいひと、牝豹のように優雅でしなやかなひとよ[1]

今朝、ぼくたちは愛し合ったね。それからきみはぼくをみつめたんだった、じっと観察するように。そしたらきみの目に、かすかなかげりが差した。不意にきみは不思議そうなまなざしをぼくにむけた。ぼくにはもうわからなかった、きみがだれを、いや、むしろなにをみているのか。時が止まってしまった。

きみは出かけ、ぼくのもとにはきみのまなざしが残った。きみはいったいぼくのなにを垣間みたのか。きみがいままで目にしたことのない、そしてこのぼくも知らないなにを。鏡のまえに行かずにおれなかった。裸になった。探した。白髪？——白髪など一本生えるたびに、きみは大騒ぎで祝ってくれる。皺？——

（1）本書は一九九九年にカルマン＝レヴィ社から出した『人間性についての手紙』という本から、形式といくつかの考えをひき継いでいる（D.-R. Dufour, *Lettres sur la nature humaine*, Calman-Lévy, Paris, 1999）。だがじぶんじしんを理解するには、しばしば一度や二度ならず出直しを迫られるものであるし、当時にくらべ、考え方もいくぶんか、ひろがりをみせた。そのため、本稿のもととなった文章は、全面にわたる再構成、改訂、増補を経て、けっきょく、あらたに書き下ろしたにひとしいものとなった。要するに、マラルメの勧めに耳を傾けたわけである。『詩の危機』でマラルメはこういっていたのだった。「いくつかの語」を下敷きにして「不備のない一個の、あたらしい語をつくる」ことをしなくてはならない〔ステファヌ・マラルメ『詩の危機』、松室三郎訳、『マラルメ全集』第二巻、筑摩書房、一九八九年所収、二四二ページ〕。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

ぼくの皺をいつも指でなぞりかえしているところをみると、皺が寄ることなどきみには端からおみとおし……。そう、きみはもっと深くまでみたのだ。きみのまなざしは、はるかむこうにまでもぐり込んでいったのだ。隠れた底の底にまで。遠すぎて、ぼくもまたおなじくらい遠くまで行かなくてはならなかった、きみがなにを目撃したのか、こんどはこのぼくじしんがそれをみるために。

きみはぼくのからだをみた。人間のからだをみたのだ。特定のだれのものでもないからだ。だれのものでもあるからだ。ひとりにひとつであるからだ。きみはみたのだ、ぼくが十万年来[*1]、ずっと変わらぬそのからだでそぞろ歩くのを。きみはみたのだ、ぼくがすべての人間であり、太古のむかしからおなじヒトのままであるのを。きみはみたのだ、自然がぼくにさずけてくれた装備を——ぼくが脳みそのかたまりをつめ込んだでかい頭の持ち主であること、軽快な足どりで歩くこと、身ごなしの敏捷さとダンスのステップを踏むときのもたつきとが、動きをともなう直立姿勢にメリハリをつけてくれること、手の親指がほかの四本の指と向かい合わせになって、からだのまえにあるものを握らせてくれること——それは飛び去ろうとするきみを、まさにつかむためにつくられた指だ——、怖がるきみをおもしろがって、笑っては歯の並びをむき出しにしてみせること、[*2]ことばがこんなふうに、意識せずとも尽きせぬ泉のようにぼくのうちなる自然から湧き出してくること。さらにはあの器官を。あれはぼくの持ち物であって、きみの持ち物ではないけれど、どっこいこいつが、どうもぼくなんかより、はるかにきみのほうにかしずくらしい……。あゝ、親愛なるモンテーニュ君、そなたといっしょにぼくも歌うよ、ふたりの声を重ねて、称讃と幻滅の対位旋律で。「あの部位ときたら諫めがたく自由奔放で、もてあましているときには機をわきまえず勝手にふるまい出し、どうしようもなく入り用のときには、これまた機をわきまえず萎えしぼんでしまう」（『エセー』[*3]、I、21）。端的にいえば、愛しいひと、牝豹のように優雅でしなやかなひとよ、きみはすべてをみたのだ。が、同時に、なにもみなかった。だって、ぼくが一個の善良な「ホモ・サピエンス・サピエンス」〔ホモ属サ

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

＊1　いまのところ、最古の「ホモ・サピエンス」が二十万年（サバを読まなければ、十九万五千年）くらいまえにアフリカ（一説によればエチオピア付近）で誕生したことはほぼまちがいない、といわれている。ただし、複雑な業界用語の変化ともあいまって紆余曲折の激しい業界である。この数字がいつまで維持されるかはわからない（最近も、エチオピアで発見の化石がホモ属の起源を四十万年ほどさかのぼらせる可能性ありと発表されたのが二〇一五年三月、その半年後には、こんどは南アフリカで新種の化石「ホモ・ナレディ」が発見され、最古のホモ属かもしれないと報道された）。その「ホモ・サピエンス」がアフリカを出て、中東に進出するのがほぼ十万年まえのことである。原人（ホモ・エレクトゥス、旧称ピテカントロプス類）、旧人（ネアンデルタール人）など先史時代の人類にたいして、いわゆる新人の学名が「ホモ・サピエンス」（現生人類または解剖学的現代人ともいわれる）。しかしこの分類はいまではただ便宜的にしか使用されず、学問上は放棄されているようだ。

ラテン語二名法は属名と種名を結合する。種は「共通の遺伝子プールを有する、現に交配しているあるいは潜在的に交配可能な生物集団」と定義される（スティーヴン・J・グールド『ダーウィン以来（上・下）』、浦本昌紀・寺田鴻訳、早川書房、一九七七年、下巻、一三九ページ）。つまり、種という分類は交配の可否によって決定される（異なる種は交配しない）。人類進化学の本では、ネアンデルタール人はしばしば「ホモ・ネアンデルターレンシス」と表記されているので、すくなくとも門外漢には、「ネアンデルターレンシス」は種を意味するようにみえる。ところが、「ホモ・サピエンス」が「ホモ・ネアンデルターレンシス」と交配したことが、遺伝子の研究からあきらかにされている（われわれ現代人はネアンデルタール人の遺伝子を受け継いでいるらしい――スヴァンテ・ペーボ『ネアンデルタール人は私たちと交配した』、野中香方子訳、文藝春秋、二〇一五年参照）。ならば、「ホモ・サピエンス」とネアンデルタール人はおなじ種にぞくさなければならない。したがって、その種名を「サピエンス」とするなら、分類上、われわれ「現生人類」の正式名称は亜種名を追加して「ホモ・サピエンス・サピエンス」、ネアンデルタール人のそれは「ホモ・サピエンス・ネアンデルターレンシス」ということになるだろう。もっとも「ホモ・サピエンス・サピエンス」なる学名じたいは、「ホモ・サピエンス」種のすでに絶滅した一亜種「ホモ・サピエンス・イダルトゥ（ホモ・サピエンス・サピエンス）」の祖先だとされた）と区別するために導入されたらしい。いずれにせよ、亜種は「便宜的なカテゴリー」にすぎないとグールドはいっている。「われわれがそれを使うのは、一つの種内に不連続な地理的に区切られたかたまりをもうけることによって変異性についてのわれわれの理解が増すだろうと判断するときのみである。現在、多くの生物学者の間では、自然界の中に観察される変異性の動的なパターンに正式の命名法を無理に適用するのは、不便であるばかりではなくまったくの誤解に導くものである、ということが議論になっ

SAMPLE
Shoshi-Suisu.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

ピエンス種サピエンス亜種〕でありつづけているかくも長いあいだ、一度たりとほんとうの変化など起きたためしがないのだからね。ぼくは種の一標本にすぎないのだからね。要するにきみがみたのは、たえまない世代交替をとおしてぼくがどんな人間〔個体〕になろうと、そのぼくが大むかしから、あいもかわらぬ「おなじただのヒト」[*4]〔種〕のままだということさ。

そう、だからかつてぼくは、ミケランジェロがかたどったダヴィデであったことがある、シェイクスピアであったことがある、じぶんの父、じぶんの母、じぶんの息子であったことがある、いまやぼくは、あらゆる世代にわたってうわごとをまくしたてる錯乱したニーチェであり、じぶんをじぶんのチチハハ〔「父－母」という一個の存在、単為生殖する両性具有者〕だと信じる狂ったアルトーなのだ……。[*5]

いったいなぜきみには一瞬にしてみてとれたのか、ぼくのうちにあらゆる人間が息づいていると。哀れみから？　ありうることだ。われらが不思議な種、そのさきゆきについてきみが自問しているすがたを何度かみかけたことがあるもの。自問のたび、きみの脳裏にどんな光景がよぎっていたのか。もしやきみは感づいたのでは？　なにか不吉なできごとがさし迫っていると。

いっしょに暮らしているこのひとは人類最後の末裔になるやもしれない、ひょっとしてそんなことを思ってみたのでは？

たぶんそうだったろう。ちょっとまえもきみはこういいつのっていたのだからね。わたしたちの過去に連綿とひかえる八百億にのぼる二足動物には、いままでなら例外なく、永劫不易な身体が無条件にさずけられてきたのだけれど、激しく様変わりしようとしている紀元後三千年紀のいま、これからやってくるものたちには、そんなことはとうのむかしに確約されなくなっている。でもね、それは自然による選択〔自然淘汰〕が人類のもとに、なにかただならぬ変異をひそかに用意しようとしているから、というのじゃない。むしろ或るべつの選択方式が着々と整えられつつあるからなのよ。人為による選択がね。いきあたりばっ

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

たりでありながら意図的、制御されていながら見通しを欠く選択、それをうながしたのは、他の種とひとてい る。」（グールド『ダーウィン以来』、前掲邦訳、下巻、一四〇ページ。）「ホモ・サピエンス・サピエンス」という表記じたいがまれにしかみられない理由は、おそらくそこにあるのだろう。

＊2　高等類人猿では強靭な歯にともなって歯槽がよく発達している。そのため、たとえば仮にチンパンジーが笑うとすれば、歯列だけでなく歯茎までむき出しになる。ここでは、サルと人間の解剖学上の相違のひとつが示唆されていると思われる。

＊3　ミシェル・ド・モンテーニュ『随想録（全訳縮刷版）』、関根秀雄訳、白水社、二〇〇二年（新装復刊）、「1の21　想像の力について」、一八〇ページ。

＊4　エピグラフに挙げられ、「性の喜び」と関係づけられているポルヘスからの引用（仏訳）は、「まぐわいのめくらめくその瞬間、すべての男はおなじただの男なのだ」とも解される（『伝奇集』の邦訳ではそのように訳されている）。「人間」も「男」もフランス語では「homme」の一語で表わせるので。この引用が再登場する本書の文脈上、「人間」「ヒト」とする（第七章最終部参照）。なお、生物学では人間を「ヒト」と表記する。これは生物種としての人間という意味あいをもつようだ。したがって、本書では「人間」（les hommes）と「ヒト」（l'homme）の対比は「個体」と「種」の対比に重なる場合がある。

＊5　「私が人間だというのは偏見です。私はすでに幾度も人間たちのなかで暮らしましたし、人間が経験できるすべてのことを、卑小なことから最高のことまで知ってはいます。しかし私はインドでは仏陀でしたし、ギリシアでは、ディオニュソスでした。――アレクサンダーとシーザーは私の化身です。……最後にはヴォルテールとナポレオンでもありました。ひょっとしたらリヒャルト・ヴァーグナーであったかもしれません。今回は勝利に輝くディオニュソスとしてやってまいりました。……天はすべてを挙げて私の到来を歓喜して迎えています。私は十字架にもかかったことがあります。」（ニーチェ「コージマ・ヴァーグナー宛一八八九年一月三日付書簡」、三島憲一『ニーチェ』、岩波新書、岩波書店、一九八七年、一九〇ページに引用。）なお、この書簡は理想社版『ニーチェ全集』（第15巻『書簡集』、一九七八年）には収録されていない。

「俺、アントナン・アルトー、俺は俺の息子、俺の父、俺の母、／そして俺。／生殖が自分のしかけた罠にかかる愚かな大航海を平らにする者、／パパ－ママ／そして子供という大航海、／父－母のよりも断然、／ばあちゃんのケツで煤まみれ。」（アントナン・アルトー「此処に眠る」、『アルトー後期集成1』、宇野邦一・岡本健訳、河出書房新社、二〇〇七年、三一〇ページ。）

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

しく自然によって受動的に選択されるだけだった、ほかならぬ人間たちなのよ。一世紀まえ、ダーウィンという名の男が現場をとおりかかり、わたしたちに自然による種の選択というものを暴いてみせた。ところがどう、こんにち書かれる研究報告ときたら、人為による種の選択への手引きとなっているわ。きみはつぎつぎ舞い込むあれら速報記事を読む。他の種から手当たり次第にもち込まれた遺伝特徴を生殖質という任意の種がもつ遺伝形質に組み込むコツ、速報はヒトが日々少しずつながらもそのコツをのみ込むようになっているさまを伝えてくる。きみはこの神業の進捗を注意深く追っていく。いまやあれこれ人為による変異をひき起こし、生物の世界から、その世界の生のままの性質を、必然性を、自明性を、不易性をとり上げてしまうこともできる。そのせいで、生物の世界はかつてとはまったく比べものにならないくらい、自然を超えたもの、はるかに奇怪でいびつなものに変わりはててしまった。どれもきみが知っているものばかりだ——人間のホルモンを組み込んだ結果、ありとあらゆる除草剤にたいする抵抗力を獲得したトウモロコシ、近い将来ぼくたちに移植することを見越して、人間用の臓器を生産するために飼育されている豚、背中に大きな人間の耳をこれみよがしに生やした奇態なマウス〔製作者の名を冠して「ヴァカンティ・マウス」と称されるこのねずみの背に生えた「耳」は、じつは、移植された牛の軟骨〕、医薬品、食品、化学製品の原料として加工利用されるインスリンやその他の有機物質を生産する子牛－工場……。加齢によって老化した器官をもうすぐ若返らせてくれることになるだろう幹細胞、これもきみは知っている。それどころか、百歳のドナーたちから提供された細胞の遺伝コードをプログラムしなおし、その年齢に達するまでに発現した老化現象の痕跡を完全に消し去るなんてことにもどうやら成功したらしい——老化の進行に巻き戻しが利かないわけではないと思わせる一種の若返り療法だね。生物の基底を再加工できる極微機具類、これもきみは知っている。なにもかもきみは知っている、長さ一ミリの、あの透きとおった美しい小さな虫についての研究、ぜいたくにも両性を具有するこの虫〔線形動物門に分類される線虫の一種〕は「C・エレガンス」なる心地よい名前

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

で呼ばれ、遺伝子そのものを変更するのではなく、遺伝子の発現形式〔遺伝子としてはたらくデオキシリボ核酸（DNA）がリボ核酸（RNA）に転写され、リボ核酸がその遺伝情報をたんぱく質に翻訳していくプロセス〕さえ変更すれば寿命を伸ばすことができる。いまや人間のごく身近なお供となり、だれもが一度はその名を耳にしたことのあるショウジョウバエ、ハツカネズミにしてはずいぶん長生きの部類に入る実験用マウス、その他、少しまえに生存期間をいままでよりも六〇パーセント延長することに成功したもろもろの種、どれについてもきみは知っている。

〔九百六十九年生きたとされるイスラエル人の族長メトセラにちなんで〕「ネズミのメトセラ賞」[2]なるものが存在することは、時代の徴候をしめしていないだろうか。賞を支える基金（きみにこの話をしている時点で四百万ドル）は右肩上がりに増えていて、老化速度の顕著な抑制、それどころか、若さの回復をめざすありとあらゆる研究――そう、「ありとあらゆる」だ、研究方法は問われない――を鼓舞している。最長記録保持者は成長ホルモン受容体のはたらきを止められたマウスで、それは通常の実験用マウス三匹をしのぎ、ほぼ五歳（生まれて一八一九日）まで生きた、まったくの健常状態でね。

きみのながめている世界はまるで巨大な陳列室だ――あるいは手術室といおうか。物づくりの天才、まゆつばものの審美眼の持ち主、計算高い商人、オッムのいかれた医者、怪しげなオカルト説教師……、人間の不備を埋め合わせてしんぜよう、面々がそうのたまっては案出する生物製品で、その世界は日々ふくれ上がっている。

ようこそ、ニュー・フローレンスへ、あらたなフィレンツェへ。世界のそこかしこでかまびすしく産声を上げるこの摩訶不思議な〈再生（ルネッサンス）〉の現場では、在来とはちがう法則にしたがって生き物が生まれ変わる。

（2）公式サイト www.mprize.org/を参照。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

あらたな〈創世記（ジュネーズ）〉、あらたな〈発生（ジュネーズ）〉というわけだ。ぼくたちが入り込んだのは想像を絶する世界、そこではなんでも屋が器用な手つきで生き物の形態や状態をこさえてみせるのだが、あまりにもその場しのぎなので、この器用仕事が明日にか、さらにはそのあとになってか、局所に及ぼすかもしれない影響をだれひとり予測できるものはいない。全体に及ぼす影響となればなおさらのこと。ただひとつたしかなのは、及ぶ影響が甚大であり、厖大であるということだけ。

だが考えずにおれない。ヒトはかく在るすべてを変質させようとしている、ならばヒトがヒトを変質させないでおくなどということがあるもんだろうか。

その瞬間、きみのまなざしはきっと憂いにかすんだにちがいない。覇気にあふれながらもドタバタと無計画に進むこの動きがやがてほかならぬこのぼくにまで達し、秩序の激変をかく望んでひき起こしている当の種に、痛棒を食らわすことになるだろうと気づいたそのときに。

ちょっとまえであれば、ぼくはあいもかわらずおなじただのヒトのままだった。この身になにが起ころうと、運命は決まっていた。ぼくはすでに書かれていたからだ。或る秘密の文字列で書き終えられていた。それは、ぼくのもとにまで経由してきて、このぼくもまたじぶんに許された生のむこうにまで、われ知らず伝えていくことになる文字列だ。ところが、〔エジプト象形文字を最初に解読したフランスのエジプト学者〕シャンポリオンの再来たちがやってきて、ぼくの出自たる自然の文字列、古い「volumen」（ウォルーメン）〔羊皮紙かパピルスをくるくる丸めた古代の文書〕のようにＤＮＡの二重らせん構造のなかに巻き取られていた文字列をまえに、解読への道を開いた。* このおおいなる書物はすでに読み終えられている。そこにはいくつかの分子によってしたためられた伝言がこめられていて、表現されたその伝言内容がこのぼくというわけだ。分子の記述のなかに書き込まれた伝言がいまや読み解けるというのであれば、当然にも近い将来、あたらしい伝言を書き込むこともできるようになるだろう。ひいてはあらたな伝言内容を表現することも。ぼくという

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

かたちで具現されていて、はるか太古のむかしから受け継がれてきている伝言内容とはちがう、べつの伝言内容をね。

ぼくは――聞くところ――ありうべき難をまぬがれているらしい。いうなれば早い者勝ちのご利益に浴しているんだそうな。なるほど。だが、だれしも知っているように、鳴り響く倫理上の警鐘は拙速な改変による人間の損傷を避けさせてくれるかにみえて、じつは最善の場合でも、その警鐘をみずからの行為規範としているひと、いい方をかえれば、みずからの知的能力についてほとんど幻想をいだいていないひとの耳にしかとどきはしない。

こうみてくると、はるか遠くまでみはるかすあのまなざしのほか、やはりなにもいらなかったのだ。牝豹のように優雅でしなやかなひと、きみがぼくにいま一度、探すべきものはこれだと有無をいわせず、しかし凛と黙したまま探求のあらたな目標を教えてくれるには。きみのシャーロックをあらたな調査へとみちびくには。それは究極の調査であり、このホームズ君がなにを探しに出かけていくかはもう決まったも同然――ヒトである。ヒトはどこからやってきたのか、なにを望んでいたのか、どこへ行こうとしていた

＊ 分子遺伝学の本によれば（たとえば木村資生氏の名著『生物進化を考える』、岩波新書、岩波書店、一九八八年などを参照）、遺伝子は、ＤＮＡの四種の核酸塩基をさす四つの文字Ａ（アデニン）、Ｇ（グアニン）、Ｃ（シトシン）、Ｔ（チミン）を組み合わせた文字列よる遺伝命令文とみなせる。この命令文はやはり四つの文字（核酸塩基Ａ、Ｕ、Ｇ、Ｃ――Ｕ＝ウラシルはＤＮＡのチミンとほぼ同一視してよいとされる）からなるメッセンジャーＲＮＡへと転写され、メッセンジャーＲＮＡは転写された命令文をリボソームと呼ばれる細胞内の粒子のもとに運ぶ。すると、命令文はＤＮＡの核酸の三文字の列（コドンと呼ばれる）にどの種類のアミノ酸をどの順序でつなぐかを指令する。コドンとアミノ酸の対応関係は遺伝暗号表として解読されている。たとえばコドン「ＵＡＵ」（ＤＮＡの核酸塩基でいえば、「ＴＡＴ」）によってチロシンというアミノ酸が指定される。こうしてリボソームという工場で各種のアミノ酸がつながれ、たんぱく質が合成される。たんぱく質は身体の構成物質であるから、身体とは遺伝命令文にこめられた命令内容が形質として表現されたものであるといえる。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

のか。なぜヒトというものを探さなくてはならないのか、日ごといよいよ疑問の余地がなくなっているように、人間、すべてのとはいわないまでも一部の人間にはじぶんから脱け出ていく用意ができていて、いずれ身体のとり替えをためすようになる日も近いからだ。それは人間が前代未聞の身体をじぶんにあてがうようになるということさ。万病にたいする抵抗力をそなえ、長寿に恵まれ、壊れても再生し、高性能の知能を埋め込まれ、生物とはみえない外観を呈し、みずからを複製していく……、そんな特徴をしめす身体。もはや未来を先取るお話のなかだけでなく、現実においても、数体の変異種（ミュータント）がどこかで胎動中、一種ならず数種にのぼるネオ人類、ポスト人類がすでに胚胎中なんてこともありえないわけではない。[3]

愛しいひと、少なくともつぎのことだけは疑いようがない。ぼくはすでに死んでいるわけではないにせよ、やはり死に瀕してはいる。どうかぼくを、惜しみなく狂おしいまでにいとおしんでくれ、なにしろぼくは最後のヒトなんだからね。ぼくが黙りこくっても心配しないでくれ、急ぐつもりがないんだ。臨終まぢかのひとにとって時間はすべてじぶんのものだからね。きみがこれだと教えてくれた目標をぼくは受け入れるよ、そう、この調査を進めていくつもりだ。いま人類にたいして犯されようとしている、あのたぐいの犯罪をめぐって。

調査にはつねに出発点というものがなくてはならない。事態のなりゆきをなぞり返し全体を語りなおす、そのよすがとなる点が。語るべき動機があってひとはしゃべるのだ。ならば、ぼくのおしゃべりはきみに語るだろう、ぼくがどこから来て、なにものであるのか、いまではもう限られたあいだしかぼくの持ち物ではなくなっているこのからだとじぶんとがひとつであると、いかにしてはっきり気づくにいたったのか。

いったいなんなんだろうね、このかぎりなく重要な持ち物とは。やがてぼくはそれを商売人、底知れぬ闇、ぼくにぼくじしんを否定するよう強要しているかに思える未来に、手のほどこしようもなくゆだねなければならなくなる。話の途中で腰を折られるみたいに。だからそのまえにきみに語るつもりだ、ぼくが

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

なにものであり、ぼくがぼくじしんからひき離されてしまったとき、なにを失うことになるのか。

はじまりにあたってまずはっきり知っておいてくれ、ぼくのからだがもつ掛け値なしに人間的である器官とはなにか。ぼくはそれをきみに語るつもりだが、からだのはたらきを解明しようとする医学者やからだの歴史に光をあてようとする人類学者のようには語らない。ましてや脳の仕組みとヒト固有のこころの動きとの関係を理解しようと努める論理学者のようには。ぼくはきみに或る小さな秘密を打ち明けるつもりでいる――ぼくがヒト特有の器官をふたつそなえているということ。器官ということでぼくの頭にあるのは、細胞組織のことではない。細胞組織がになうさまざま生化学的代謝のことではない。そうじゃなくて、器官の在るがままのなりたちを土台に構築された機能ということさ。それはヒト以外にはない機能なんだ。ぼくはそういう器官をふたつ所有していて、ふたつは他の生物種にはみられない関係に置かれている。一方の器官はぼくに知識をもたらし、もう一方の器官は――さきの器官に比べれば、おおまかな輪郭をえがくのさえひと苦労だが――ぼくに快楽をもたらす。ヒトもどきの豚だろうが豚が産んだヒトもどきだろうが、いずれの身体であっても生み出すことができないにちがいないもの、それがこれさ。ぼくがヒトであるということはまさにそこに根ざしている。愛しいひと、牝豹のように優雅でしなやかなひとよ、こ

（3）なにはともあれ、事情に精通した科学者にとってこの蓋然性はゆるぎない確信になっている。たとえば早くも一九九九年、イギリスの国際科学雑誌『ランセット』（The Rancet）（三五三巻、九一四七号、一九九九年一月九日）の編集委員たちは、人間のクローンが作製されることは「避けられない」とみていて、鷹揚な博愛主義者よろしくこう提言した。将来のクローンたちを人間たる完全な権利を有する存在としてとらえるべきであると。二〇〇八年にはアメリカ合衆国のラホヤ［カリフォルニア州サンディエゴ市北部の地区］で、ステマゲン社（Stemagen Corp）と再生科学医療センター（Reproductive Sciences Center）が、成人の皮膚から採取した細胞をもとに、クローン技術を使って、胚盤胞段階［胚胎して約七日めにあたる生育段階］まで達したヒトの胎児をつくり出したと発表することになる。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

れからきみとする対話では、ぼくお気に入りのこのふたつの器官をぜひとも話題にしたい。さいわいにもきみは、みるもあきらか、またぼくにとってもまことにうれしいかぎり、そのふたつの器官に特別の関心を寄せているからね。記憶を超えた遠い過去にさかのぼるぼくの古いからだのなかに、どのようにして問題の器官ができ上がったのか。どのようにしてぼくの性器とぼくの脳は、ヒトであることのこのうえないしるしである器官となったのか。知識と快楽をむすび合わせる秘密の糸とはどんな糸なのか。いまのところぼくは、快楽を身をもって味わった、知識をわがものにしたと、あくまで仮定されている存在にすぎない。だがやがて死ぬとしても、たまさかありえないわけでもないさ、そのときにはかくもよく生きてこそ死ぬ存在、それがまたぼくであるなんてこともね。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com